

卒業

今年も約541名の学生が緑ヶ丘から巣立っていきます。社会の不況の風に吹かれながらも、全国の企業から採用され、今年も変わることがなかった「就職に強い商大生」。社会への大きな希望に燃える卒業生と、すでに社会で活躍するOBの三人の方にメッセージを寄せていただきました。

卒業にあたって

企業法学科

佐竹 郁江



私と小樽との出会いは大学入学がきっかけである。入学以前は小樽について「ノスタルジック溢れる街」程度の認識しかなかったのだが、それだけでも小樽にあこがれる理由は十分だった。

商大生となり、大学生活へ馴染んでいくにつれて、商大だけでなく小樽の街にも親しんでいった。はじめは単なるあこがれであり、まるで旅人が土地土地の風情を楽しむような気分で毎日を過ごしていたのだが、自らが小樽に住むようになって小樽に対する気持ちは格段に大きくなっていった。ここで言う「小樽」は、単にその土地だけを指すものではない。小樽に暮らす人々、その人々とのふれあい、そして商大生としてすごした四年間、それら全てが私にとっての「小樽」である。

懐かしさ溢れる街並みの中にも常に何か新しい発見のある街、小樽。同様に、大学に入って出会った人々も常に新しい発見を私に与えてくれた。中学、高校とそれぞれ違う土地で学生生活を過ごした私だが小樽ほどに思い入れが残る土地はない。それほどに濃厚な時間を過ごせたのだろう。

大学生活でやり残したことがないと言えば嘘になる。しかし、「小樽」とふれあえたことは非常に有意義であり、一生の糧ともなることだろう。これまでなら新たな旅立ちの時は常に期待が寂さを上回っていたものだが、今回においては例外である。はっきり言って非常に離れがたい。しかしこれからまた別の土地で社会人として新しい日々を送ることとなる。「小樽」との出会いに感謝しながら、新しい土地での新たな出会いに期待して「小樽」を後にしようと思う。

4年間の宝探し

～在学生へのメッセージ～



商学科

中村 亮一

少し息をあげながら地獄坂をのぼった4年前のことを今でもはっきりと覚えています。勉強に集中し、自分の知識・教養を高めるという目標を持ち、僕は商大に入りました。ですが、現実はあまり勉強もせず、要領よく単位を取り卒業することが出来ました。こんな僕の4年間は、大学での最高の宝を見つけるために費やされた時間でした。

大学は宝庫です。「何を宝とするか」という価値観、またそれを「どうやって発見するのか」という方法は様々です。僕は4年間という時間をかけて「仲間」という「宝」を見つけました。自由な時間を使って遊べる仲間、二日酔いで次の日講義に出られなくなるほど飲んで騒げる仲間、テスト前にみんなでノートを集め、知恵を絞りあって模範解答を作る仲間、自分を批判してくれる仲間…。

僕自身「宝」の存在に気がついたのはつい最近、「大学で何を得たのか?」という自問がきっかけでした。「勉強です」と胸を張って言えると良いのですが、現実の成績表はほとんどが「可」。就職活動で人事に執拗に突っ込まれたことを思い出します。学生の本分でもある勉強から習得したものがほとんどない自分に気づき、少し寂しくもなりました。その自問に対する僕の答えは、苦しいことも楽しいことも共にしてきた「仲間」でした。僕が得たものは「仲間」で、それなしにして大学生活は語れない、と。尊敬出来る先輩と同輩、そして後輩。普段はそれほど大切さに気づけなかったものの、卒業を目の前にしてやっと自分の「宝」に気づくことができました。

小樽商科大学は山の上にあります。夏は下界(小樽市内)より寒く、冬は下界と天気が違います。小樽駅から大学までは坂道が続き、ちょっとした登山気分を味わうことが出来ます。その地獄坂を登りきったところに、「宝」が眠っている場所＝商大があります。ひとりひとり、「宝」を探してください。宝は決して自分に近づいてきません。自ら近づいていき、探し、見つけなければなりません。宝を見つけるコツは興味あるものに近づいていく積極性と、ほんの少しの勇気を持つことです。

卒業するときに、自分の「宝」が何かひとつでも胸を張って言えれば、大学生活は充実したものに違いありません。皆さんひとりひとりにとって最高の「宝」が見つかるよう願っています。